

生徒が学びを希求する学校に

アクティブラーニング、キャリア教育、確かな学力。どれも授業のあり方に関係してくるキーワードですが、そのすべてに通底する、これからの学びとはどのようなものなのでしょう。文部科学省・国立教育政策研究所の教科調査官、田村学氏にお話をうかがいました。

取材文／松井大助 撮影／平山諭

アクティブラーニングで「確かな学力」が育まれる

アクティブラーニングが目指すのは、生徒が自ら探究し、協働するような学習だと思えますが、それは、文部科学省が掲げる「確かな学力」の育成の方向性とも重なります。

「確かな学力」とは、学校教育法にも示されている三つの要素のことです。

一つめは、「知識・技能の習得」。

二つめは、知識・技能を社会や暮らしの中で活用していくために必要な「思考力・判断力・表現力等の能力」。

三つめは、主体的に学習に取り組む態度、いわゆる「学習意欲」。

これらはどれも大事なのですが、今、特に課題とされているのは、二つめの要素、思考力・判断力・表現力等の「能力」の育成です。等々つけているよ

うに、思考力・判断力・表現力だけでなく、知識や技能を活用していくための幅広い能力です。こうした能力の育成を重視しよう、というのは、世界的な潮流でもあります。

これまでの授業は、「知識・技能の習得」に重きを置いていました。その場合、乱暴な言い方をすると、授業の

エンドゾーンさえ押さえれば何とかならた面がありました。学習内容を教師

がチャート&トークの講義で示し、最後に「これを覚えておけ」と教え込むようなスタイルです。

しかし、授業で「能力」の育成まで行うとなれば、知識のように詰め込むことはできません。授業の中に、思考・判断・表現するなど「生徒一人ひとり

が能力を発揮する場面」が用意されていないといけない。そのように学習活動のプロセスが充実してこそ、個々の能力は鍛えられます。

つまり、これまでの授業は「生徒が何を学ぶか（学習内容）」を重視していましたが、これからは「生徒がどのように学ぶか（プロセス）」も、学習内容と同等もしくはそれ以上に大事にするべきなのです。

そしてそのプロセスを充実させるうえで、鍵を握るとみられるのが、授業の中にインタラクション（相互作用）とリフレクション（自己内省）を入れることです。他者と相互にかかわるなかで、自分の考えをまとめて表現することや、新たな知見を生むことを経験する。その行為を自ら振り返ること、思考や表現の仕方を見直し、これらの能力を高めていく。こうした学習は、生徒が自ら学ぶアクティブラー

ニングと言えるでしょう。

このような学習が求められるようになった背景には、いくつかの要因があります。まずあげられるのは、社会の変化です。

「昔前の社会では、既存の知識や技能を「習得」し、そこで覚えたことを安定的に「再生」する場面が多くありました。上司や先輩から教わったことをよく覚え、習ったとおりに作業する、といったように。

ところが情報化社会の今は、我々は大量の情報を瞬時に入手できるようになり、膨大な知識を覚えておく必要性が薄まりました。また、最新情報はどんどん更新され、既存の知識や技能がすぐに陳腐化することも増えました。加えて、型どおりの反復作業はロボットが担うようになり、人間の出番は減りました。社会では、ものごとを覚えてそのまま再生することよ

1962年生まれ。新潟大学教育学部卒業後、上越市立大手町小学校教員、上越教育大学付属小学校教員などを経て、2005年より文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官に。国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官も併任。教員時代より、生活科・総合的な学習の時間の実践、カリキュラム研究に取り組む。

文部科学省・国立教育政策研究所 教科調査官

田村学



り、手にした知識や技能を「活用」して、新しい価値を「創造」することのほうがり、より求められるようになりました。

だから学校の授業でも、生徒たちが手にした知識・技能を活用し、問題解決や創造をするというプロセスを学ぶ必要性が強まったのです。例えば、生徒が体験から感じ取ったことを、国語や美術で習った知識や技法を使って文章や絵で表現したり、理科で学んだことをもとに仮説や実験の計画を立て、その実験結果を整理して発

表する、といったぐあいに。

しかも、そうやって知識や技能を覚えるだけでなく「活用」していくと、バラバラだった個別の知識や技能が関連づけられてネットワーク化され、記憶に残りやすいことも、さまざまな研究でわかってきました。

学力の二つの要素、「知識・技能の習得」においても、教師が教え込むより、生徒自身が思考・判断・表現するプロセスの中で身につけたほうが、効果的だったのです。これも授業の変革を促している要因の一つです。

学力向上の視点だけでは危うい。未来を創造する主体の育成を

もつとも、学力の要素である「能力」の育成や「知識・技能の習得」に努めさえすれば、未来の社会で活躍できる人材が育つかといえば、その点は意外と怪しいところです。

「未来はこうなりそうで、その社会で必要とされる能力や知識はこれこれのようなものだから、それを生徒たちに獲得させる」という、逆算による機械論的な発想だけで、果たして人は育つのか。

そうではなく、生徒が「未来は自分たちでつくるものだ」と思い、実際に身のまわりのことを少しでも変えようと動いてみたときに、そこでの成功や失敗を通して、本当に未来を切り拓く能力や知識を獲得していくという側面も大きいのではないのでしょうか。そのように自ら社会にかかわろうとする意識、いわば「未来社会を創造する主体としての自覚」を育てることも重要だと思っています。

では、どうすれば「未来社会を創造する主体としての自覚」を育てることができのでしょうか。

ポイントとなるのは、生徒が自ら実社会とかかわり「探究」するような

学習を増やすことだと思います。具体的には、

- ① 生徒が自分で課題を見つける
- ② 必要な情報を収集する
- ③ 集めた情報を整理・分析する
- ④ 気づいたことや考えたことをまとめて発表・表現したり、考えたことを行動に移したりする

こうしたプロセスの学習をくり返すことです。その学習を通して、生徒が課題に対する答えや解決策を自分で導き出していくと、彼らは「自分が動けば知りたかったことが見えてくる」「自分たちで考えたり動いたりすれば世の中を少しずつ変えられるかもしれない」という手ごたえを得ます。そうした感覚が積み重なることで、「これからの社会をクリエイトするのはまさに自分たちなんだ、そのために今いろいろ学んでいるんだ」という意識も育つと思うのです。

さて、その探究的な学習に取り組むとすれば、ぜひとも頭に入れておきたいことがあります。探究というのは、本質的には「学び手に求めがなければいけない」という点です。

生徒がこの世界のことです。不思議に

思っていることがある。生徒が身のまわりのことでなんだか気になっていて解決したいことがある。そうした「学び手の求め」から始まるのが探究です。仮に、先生が一方的に学習テーマをあてがうなら、生徒にとって学びの動機付けは外発的なものとなり、安っぽくなりません。そこから課題解決型の学習にしても、グループワークやふり返りを取り入れても、生徒にとって本当の意味での能動的・主体的学習にはなりにくいでしょう。

ですので、難しくはありませんが、先生方にとっては「どれだけ学び手の立場に立てるか」が重要になります。衣食住をはじめとする暮らしのことから、時事的な話題まで、生徒たちの興味関心をキャッチし、学び手の求めがあるような学習テーマを、教科の授業

にうまく組み込んでいく。そのときに生徒たちは、「自分が知りたい」「自分が解決したい」という内発的な動機から、より能動的・主体的に学習していきます。

入試や内申のためだけに勉強するのではなく、生徒自身が目の前のことを探究したくて学習する。その中で社会とかかわる手ごたえをつかみ、自らの手で未来の社会を創造したくなつて、社会の課題を自分たちで解決していこうと、さらに探究して学んでいく。それは「社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現する」というキャリア教育の方向性と一致しますし、アクティブラーニング——日本語で訳せば「能動的な学習」が、目指すところでもあると思うのです。

生徒主体の探究学習と教師による教授を調和させて

なお、誤解しないでいただきたいのですが、私は、授業全部を学び手の求めから始める探究学習にすべきだ、と言いたいわけではありません。

生徒が自分の関心ごとを追究するなかで獲得する知識や技能には、偏りが出てきます。それとは別に、一定

の知識や教養を身につけることも社会で暮らしていくには必要。先生方がそうした知識を生徒にきちんと教授していくことは、今後も否定されることではないと思うのです。

問題は、現状では生徒が受け身すぎることです。ですから、教科の授業

の進め方を見直し、また、教科横断の探究ができる総合的な学習の時間も活用し、生徒の能動的な学習の機会を増やすことはやはり大切。そのうえで、生徒主体の探究的な学習と、教師によるプロフェッショナルな教授を、有機的に結びつけてバランスを取っていきたいところです。

この点に関して注目したいデータもあります。

平成25年と26年の小・中学校の調査結果ですが、「総合的な学習の時間で探究学習に力を入れてきた学校」のほうが、児童・生徒の学力調査における各教科の問題正答率が高い、という相関が見られたのです（文部科学省・国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査報告書」）。知識の「習

得」をみる問題でも、知識の「活用」をみる問題でも、正答率が高くなっています。

相関であり、因果関係まで証明されたわけではありませんが、探究的な学習によって、学ぶことのおもしろさや、知識の習得や活用が社会の中で役立つことを実感すると、生徒は科学学習を含めて、学習全般により前向きに取り組むようになる、と考えられるのです。

生徒が自身の疑問や課題を探究し、その中で知識の習得や活用の大切さを知り、教師の教えも貪欲に吸収していく。そうした空気が醸成されれば、学校というのは、生徒にとっても、教師にとっても、今まで以上にすばらしい場所になるはずです。

